

群馬県内におけるヤマビルの生息分布の変遷

予算区分：県単	研究期間：令和元～4年度	担当：上席研究員 坂庭 浩之
---------	--------------	----------------

I はじめに

ヤマビル (*Haemadipsa japonica*) は人を吸血することで不快な生物として認識されており、観光客や農林作業員にとって活動の制限要素となっている。2006年の分布状況(杉山・坂庭, 2009)、2016年の分布状況(坂庭, 2019)を過去に報告しており、本報で2022年の分布状況を報告する。

II 方法

調査方法は県内の鳥獣保護管理員、自然保護指導員、森林組合職員、群馬県庁職員に書類または電話等で聞き取りをした。一般の方にヤマビルの発見地点を報告してもらうための「ヤマビル報告アプリ」を作成・公開し、SNSなどで広報し情報を得た。

分析方法は、2次メッシュ(世界測地系)を4分割した5kmメッシュを設定し、そのメッシュ内でヤマビル分布が広く点在している場合は「広範囲分布」の生息とし、メッシュ内で偏在している場合を「狭範囲分布」の生息として判断した。

III 結果及び考察

鳥獣保護管理員または自然保護指導員から34地点、ヤマビル報告アプリから37地点の報告があった。また、群馬県職員から6地点の報告を得た。2016年の段階では把握されていなかった新しいメッシュでの発見情報が26地点含まれていた。

図-1に杉山・坂庭(2009)の調査による結果を、図-2に坂庭(2019)の調査結果を記載した。2009年の調査結果では、広範囲分布：17、狭範囲分布：21、合計38メッシュであった。2016年の調査結果では、広範囲分布：27、狭範囲分布：23、合計50メッシュであった。2022年の調査結果では、広範囲分布：40、狭範囲分布：30、合計70メッシュであった。2009年調査(図-1)と2016年調査(図-2)の7年間に1.3倍に拡大したことをすでに報告している(坂庭, 2019)

2016年調査(図-2)と2022年調査(図-3)の6年間に、1.4倍に拡大したことが確認された。2022年調査で急速に分布が広がった場所として、県南西部(南牧村)や県東部(桐生市黒保根地区)が確認された。

2009年と2022年の間に分布が1.8倍に拡大しており、今後も急速な拡大に注視する必要がある。ヤマビルが拡大した要因については、ヤマビル体内に残っていた血液塊の分析からシカの存在が影響していることを森嶋が報告しており(森嶋, 2021)、2020年にシカの有害捕獲または狩猟捕獲があったメッシュと、2022年のヤマビル分布メッシュと重ねた(図-4)。シカが分布しているメッシュ範囲内でヤマビルが分布していることが図上からも明らかで、ヤマビル未分布のメッシュも多いことから、今後も分布拡大が継続することが示唆された。

本報はヤマビルの分布状況を把握した点に加え、シカにより他種の生物が拡大したひとつの事例を示す研究報告であり、マダニやウイルスなども同様に拡散していることも推測される。

IV おわりに

ヤマビル対策として筆者が 2019 年の報告で Deet 成分 (N,N-ジエチル-m-トルアミド) を 30%含む虫除けスプレーが有効であり、入手性が良い点からも使用を推奨してきた。2022 年時点ではこれら虫除けスプレーを販売する医薬品メーカーのホームページでも「ヤマビル」に有効であることが追記されており、これらを適切に使用しながらヤマビル対策をすることが手軽で確実な方法である。

引用文献

- 1) 森嶋佳織 (2021), DNA 解析によるニホンヤマビルの宿主動物の識別と分布拡大範囲の推定, 森林科学, 92, 8-11.
- 2) 坂庭浩之 (2019), ヤマビルの生息分布と薬剤感受性. 群馬県林業試験場研究報告, 23 号, 6-10.
- 3) 杉山直人・坂庭浩之 (2009), 群馬県内のヤマビル分布状況, 群馬県立自然史博物館研究報告 (14), 145-148, 2010

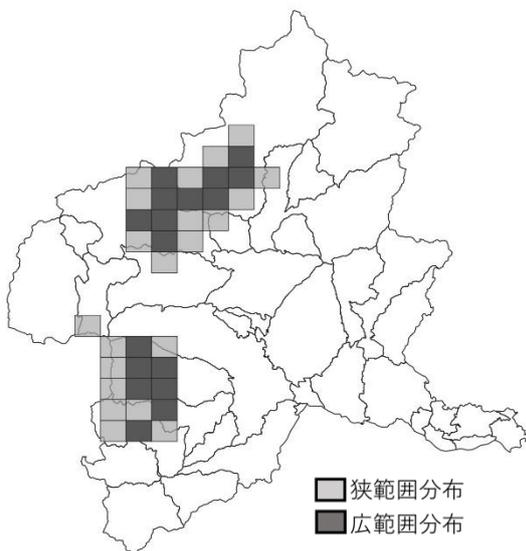


図-1 2009 年分布

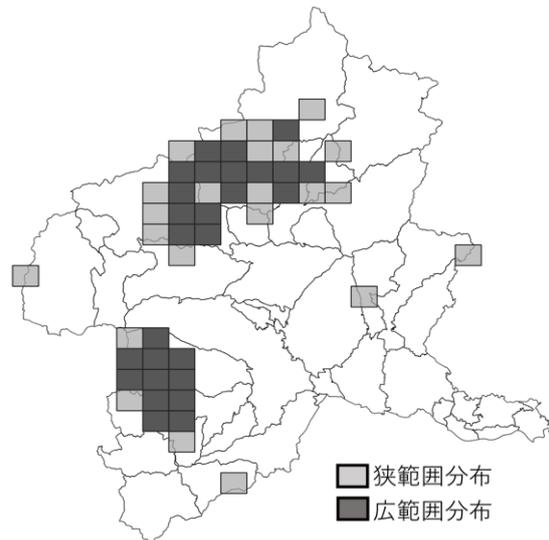


図-2 2016 年分布

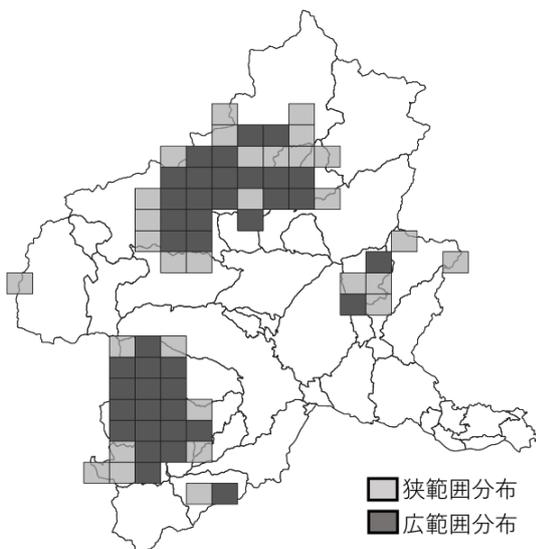


図-3 2022 年分布

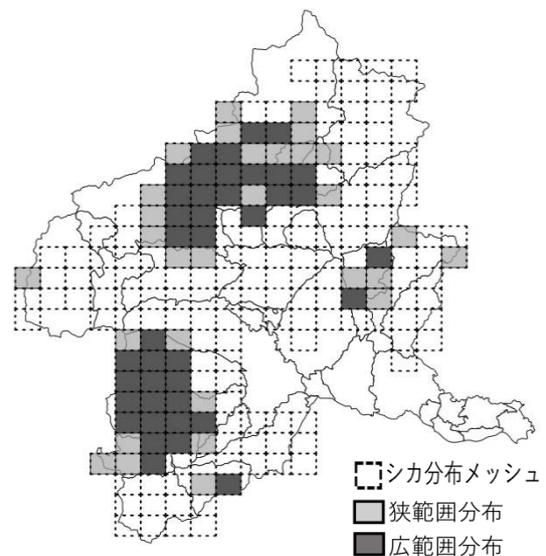


図-4 シカ分布と 2022 年分布